

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 30 日現在

機関番号：32605

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720075

研究課題名（和文） 地域文学組織を基盤とした近代日本語文学圏の「草の根」文学交流研究

研究課題名（英文） A study of inter-regional literary exchanges in the Japanese literary field in early 20th century

研究代表者

藤澤 太郎 (FUJISAWA TARO)

桜美林大学・人文学系・講師

研究者番号：30406847

研究成果の概要（和文）：本研究は、近代日本語文学圏における地域的文学組織間の相互交流の様相とそのネットワークの状況を明らかにすることを目的し、特に山形県の文壇・詩歌俳壇を中心点として資料の調査収集と分析を進めてきた。現在山形県を中心とした地域文壇・詩歌俳壇間の交流について戦前・戦後それぞれ時代を追って整理発表している段階であり、今後日本の植民地統治下文壇と関係する部分も含めて関連論文を順次公開していく予定である。

研究成果の概要（英文）：This research considers inter-regional literary exchanges in the Japanese literary field in early 20th century. It especially focuses on literary exchanges between Yamagata prefecture and other regions including colonial Taiwan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：地方文学、台湾文学、山形県文壇

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、それまで日本国内の文学研究においても中国国内の文学研究においても看過されてきた日本の植民地統治下（及び「傀儡」政権下）の文学を見直そうとする動きが活発になり、戦前の台湾、朝鮮、関東州・「満洲国」、中華民国（汪精衛政権等）、樺太等における文学活動について積極的な再評価が進められてきた。そのような再評価の中で取り上げられる作家は、全国的な規模の文学史では「無名」の作家・詩歌俳人が大半であり、いわば植民地文学研究の中で初めて

「発見された」作家という位置づけが往々にしてなされてきた。

しかし、それら作家・詩歌俳人は、全国的な意味での文学史からこぼれ落ちたとはいっても、その全てが本当の意味で「無名」であったわけではなかった。彼らの多くは、各地方の地域的な規模の文壇・詩歌俳壇で活動しており、その中では一定の地位を占めているものが多かったのである。

これら作家・詩歌俳人については、各地域単位の文学研究の中ですでに一定程度研究が進んでいる場合もあったが、一方でそのような各地域単位の文学研究は往々にして一

県主義・一地域主義的な傾向が濃厚で、地域をまたいだ交流関係や、地域を移動した活動については看過されがちな傾向にあった。

本研究は、このような研究状況を乗りこえようとする問題意識から、主に 1910 年代から 1940 年代の時期について、特に日本の植民地統治下における文学活動と日本の各地方に存在した地域的文学コミュニティの文学活動との関連性に着目し、全国的規模の文学史では記述対象とならない「無名」の作家たちによる国境を越えて展開された「草の根」の文学交流の様相とそのネットワークの状況を明らかにすること最初の出発点としたのであった。

2. 研究の目的

本研究は、上述の通り近代日本語文学圏の各地域間における作家・詩歌俳人の交流の様相の分析を出発点とするものであるが、それは直接的に地域文壇間の関係や文壇・詩歌俳壇ネットワークの様相を明らかにすると同時に、それによってこれまでの研究では説明しきれなかった様々な要素を可視化することも目的としている。それらをまとめて具体的に整理すると下記ようになる。

(1) 本研究は、第一義的には近代日本語文学圏各地域の地域的文学活動に着目しながら、その地域を越えた交流とネットワークを解明していくことを目的としている。また、日本の植民地であった時期の台湾、朝鮮、関東州・旧「満洲国」、中華民国（汪精衛政権）等の地域に関わる文学交流に着目することで、結果的に「一国文学史」の範囲では必ずしもおさまらない「国際的」文学交流を描き出すことも目的とするものである。

(2) 本研究で主に取り上げる全国的な文学史では「無名」な作家によってもたらされる交流は、多くが地域に根付き地域の人々に支えられたものであることが多く、その文学交流を描くことによって地域間の「草の根」交流を描くことも可能になると考える。このようなより広い意味での交流の分析による歴史学・社会学・教育学等への成果の還元も、本研究の目的である。

(3) 本研究が取り扱う各地域の文学活動は、中央の詩歌俳壇結社組織とも密接に結びついていることが多く、その相互の関係を分析することはこれまで曖昧に「結社の性格」・「地域の特徴」といわれてきた文学事象に一定の説明があたえる可能性を持つものである。地域的な文学交流と絡めてそのような作品そのものに関わる問題を分析していくことも本研究の目的となる。

3. 研究の方法

(1) 本研究は中心的に分析していく問題群として下記の①～④の4つのテーマを設定し、前記「1」・「2」で記したような問題意識のもと、基本的に①～④の優先順位をつけて研究を進めた。

① 台北文壇と山形文化圏の交流

山形県の文壇・詩歌俳壇と台北（あるいは台湾）の文壇との間には詩人長崎浩、歌人齋藤勇を中心に戦前・戦後を通じて結びつきを持っていた。同時に、山形の詩壇・歌壇は東北地方を中心に全国各地域の文壇・詩歌俳壇とも密接な結びつきを持っている。本テーマでは山形県詩壇・歌壇の状況の変遷と、そのネットワークの変容について、台湾との関係も含めながら戦前・戦後それぞれ通時的に明らかにしようと考えた。

② 関東州・旧「満洲国」を中心とした詩歌交流

関東州・旧「満洲国」を中心とした日本語による詩歌活動の中で重要な役割を果たした詩人の多くは、それぞれ「内地」の出身地・関係地・出身学校・所属結社等を通じて各地域の詩壇と一定程度結びつきを持っていた。本テーマでは引揚後の状況も含めてそのネットワークを明らかにしようと考えた。

③ 中華民国（汪精衛政権）を中心とした文壇交流

中華民国汪精衛政権下地域で活動した日本人詩人も、やはりそれぞれの出身地・関係地を中心として「内地」各地域の詩壇と結びつきをもっていた。本テーマでも、テーマ「②」同様引揚後の状況も含めてそのネットワークを明らかにしようと考えた。

④ 朝鮮を中心とした詩歌交流

朝鮮の歌壇は百瀬千尋・頼田島一二郎・君島夜詩等を中心とした『ポトナム』の勢力と細井魚袋・市山盛雄中心とした『真人』が大きな影響力を持ち、それぞれがネットワークを有していた。本研究では『アララギ』・『潮音』・『詩歌』・『水甕』等その他の中央歌壇結社の各植民地における活動全体を視野に入れながら、そのネットワークについて考察していくことを考えた。

(2) 研究の手順としては、まずは東京における文献調査と、各地域の県立図書館、あるいは関連する市町村立図書館におもむいての調査とを並行して、資料収集・整理分析を行った。その成果については、基本的には順次論文・資料集の形で公開していくことを目指した。

4. 研究成果

「3」(1)で示した各テーマそれぞれについての進捗状況と成果については下記の通りである。

(1)台北文壇と山形文化圏の交流

期間中、山形県内の山形県立図書館・鶴岡市立図書館（鶴岡市郷土資料館）・酒田市立図書館（光丘文庫）・米沢市立図書館・上山市立図書館・寒河江市立図書館・新庄市立図書館・西川町立図書館等各図書館と関係各地域の図書館の調査を行った。このうち関係する資料を最も多く所蔵する山形県立図書館では、戦前刊行の文芸誌・詩誌・歌誌と関連書籍についてほぼ一通り調査を終え、他機関での調査と合わせて基本となる資料の収集はほぼ終了した段階である。

現在は以下の各テーマに沿って資料の分析を進め、成果の発表を準備している段階である（一部はすでに公開済）。

①戦前の山形詩壇について

I. 新体詩の登場と黎明期の詩人

II. 日刊紙と詩歌

- a. 『山形新聞』
- b. 『日刊山形』
- c. 『山形民報』
- d. 『新山形』

III. 明治四〇年代の登場

- a. 鈴木健太郎
- b. 齋藤禮助
- c. 真壁仁
- d. 長崎浩
- e. 木内進

IV. 『北方』と『犀』

V. 民謡と綴方の時代

- a. 村山俊太郎
- b. 澤渡吉彦

VI. 『湖北』・『味爽』・『風景』

VII. 大正三年世代の登場

VIII. 戦争下の詩歌

IX. 中学校・師範学校・高等学校の活動

X. 庄内の詩歌

XI. 置賜の詩歌

②戦後初期の山形詩壇について

I. 岩根沢の文学活動

II. 『獵人』と『季節風帯』『詩旗』

III. 『詩旗』

IV. 山形と疎開詩人

V. 山形詩人協会

VI. 『詩標』

VII. 山形県詩人協会

このうち戦前部分の実質的な冒頭部となる①-Ⅲの時期については、「萌芽期における

地方土着的農民詩運動—山形詩壇を中心とした素描的覚書』『桜美林世界文学』第7号（桜美林大学世界文学会、2011年）として一部まとめており、2012年7月『山形・詩人と詩誌の系譜—鈴木健太郎と「血潮」・「詩脈」』としてその中心部分を公刊する予定である。以降『山形・詩人と詩誌の系譜』という総題で1-Ⅲ～XIまでの内容を順次公刊していく計画であり、その中で地域間の文学交流について相当量の紙幅をさいて論じていくことを予定している（植民地に関わる部分については特に長崎浩の部分を中心に論じたい）。

②の戦後部分については②-Iについて「岩根沢文学誌稿—山形県のある詩人疎開地における文学的コミュニティの形成と展開」『桜美林論考人文研究』第3号（桜美林大学人文学系、2012年）としてまとめており、以降も順次成果を発表していきたいと考えている。

また、これまで収集した歌誌・歌集等歌壇に関わる資料については上述の詩壇の論考とは別の形でまとめ、特に齋藤勇に関わる部分を中心に、植民地と関わる地域間交流について取りあげるつもりである。

(2) 関東州・旧「満洲国」を中心とした詩歌交流

関東州・旧「満洲国」地域で活躍した詩人中、古川賢一郎と島崎曙海に着目し、各地で資料収集を行った。主に古川賢一郎と熊本・長崎詩壇（+『詩の家』のネットワーク）、島崎曙海と高知詩壇との関係を中心にまとめることを考えているが、現時点では最も進行が遅れている。

(3) 中華民国（汪精衛政権）を中心とした文壇交流

上海での調査を含め各地図書館で調査と資料収集を行い、中華民国汪精衛政権下地域で活動した詩人中、池田克己・黒木清次については一定程度資料の収集を終えることができている。池田克己と関西圏詩壇（+句誌『天の川』のネットワーク）、黒木清次と宮崎県詩壇のネットワークについて、それぞれまとめている段階である。

(4) 朝鮮を中心とした詩歌交流

これまで戦前期の『ポトナム』を閲覧して創刊に中心的に関わった百瀬千尋に関する資料の収集を行う他、『アララギ』・『潮音』・『詩歌』・『水甕』等他歌誌の動向についても調査を進めている段階である。また並行して、内野健児・古賀残星等朝鮮詩壇に関わる主要詩人についても意識して資料調査を行っている。このうち第一段階として『ポトナム』の百瀬千尋を中心とした論考について、他に先がけて早期にまとめ論文等の形で公刊し

たいと考えている。

上記(1)～(4)のテーマはそれぞれ独立したものであるが、最終的には「地域文学組織を基盤とした近代日本語文学圏の「草の根」文学交流研究」という課題全体を見通した包括的な結論の方向性を出すことが望ましいことはいうまでもない。この点について、第一段階としては『山形・詩人と詩誌の系譜』の執筆・公刊の中で上記各テーマの調査分析から得られた成果の蓄積を適宜取り入れ、同文の中で一つの見解見識を示すことを目指したいと考えているところである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①藤澤太郎、岩根沢文学誌稿—山形県のある詩人疎開地における文学的コミュニティの形成と展開、桜美林論考人文研究、第3号、2012年、査読有、37-54ページ

②藤澤太郎、萌芽期における地方土着的農民詩運動—山形詩壇を中心とした素描的覚書、桜美林世界文学、第7号、2011年、査読無、65-80ページ

③藤澤太郎、金川中学校から見える「都市」、岡山と東京と—張文環・岡山時代の学籍問題を出発点とした台湾人内地地方留学生の意識をめぐる論考、桜美林世界文学、第6号、2010年、査読無、10-17ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤澤 太郎 (FUJISAWA TARO)
桜美林大学・人文学系・講師
研究者番号：30406847

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：